

朝日新聞大阪版

「複言語」教育の導入を



なかじま みねお 36年、松本市生まれ。東京大大学院修了。東京外国語大学長などを経て、現職。専門は国際社会学。著書に『北京列強』『国際関係論』『21世紀大学』など。

広く国民全体に求められるべきである。さらに高等教育の段階では、母語と英語をもう一つの外国語によって知的世界をさらに広げる「複言語主義」教育が必要ではないか。

空路ではわずか二、三時間、欧米人からすれば見分けが難しい日本・韓国・中国といった東アジアの近隣の人々の間にあっても、使用される言語は全く異なっていて、それを学ばなければ十分なコミュニケーションができない。一方、いまや国際語ないしは共通語となっている英語をツール(道具)にすれば、ITの進化もあって、東アジア域内はもとより、地球規模でも即座に「コミュニケーション」が可能になる。

このような現実を考えると、グローバルな言語としての英語のポジションはもはや争う余地がないのであって、国民の英語力がGDP(国内総生産)などの数値と並んで、国力の比較指標になる時期がやがてくるであろう。

中国、台湾、韓国など東アジアの近隣地域のみならず、東南アジアなどの非英語圏諸国でも、グローバル化の時代に英語力をより高める

グローバル化時代の英語力

るかについて、耳利な検閲を取り組みがなされている。私はこの夏、タイのバンコクで開かれた国際会議の基調講演に招かれたが、会議のテーマは「グローバル文化のなかでの言語 フリッジカパリアか?」というものであった。作家の水村美苗さんが文芸誌「新潮」

九月号に発表した論考「日本語が亡びるとさー英語の世紀の中で」も、この問題に鋭く迫っていた。さて、わが国では小学校への英語教育導入をめぐる、英語よりも国語をとか、英語をわると日本語がダメになるといった議論が依然としてあるようだ。しかし、オセロなどのオセロ・サムゲームのように母語が英語か、といった議論

の段階にもはやとどまっているのではない。

そこにとどまっていたのは、これからのグローバル化の時代に、わが国の若者や子どもたちを、常に「英語コンプレックス」に落ち込ませ、てしまいかねないからである。

中嶋嶺雄
言語や文化の共通項が多いとは、その核心は、頭脳の柔らかい幼児のうちからクラシック音楽を耳から聴いて覚え、繰り返し練習することにある。楽譜からは入らな

い。近、複数の外国語の習得が相互に刺激しあって個々人の言語空間を豊かにする。母語の学習にも効果的影響をもたらし、この「複言語主義」(bilingualism)が唱えられている。多文化共生のための「国際化共生のための」が唱えられている。多文化共生のための「国際化共生のための」が唱えられている。多文化共生のための「国際化共生のための」が唱えられている。

やほりわが国においては、問題は旧来の英語教育の在り方にあるのであって、そこを抜本的に改革しない限り、英語を習っても英語を話せないという悪循環からいつまでもたつても解き放たれないであろう。小学校の英語教育が2011年度から導入されることになり

た今日、一つの手法として、幼児からの音楽教育で世界に広がって、ある鈴木鎮一の才能教育の方法(スキ・メソッド)は、ぜひ参照されるべきであろう。

その核心は、頭脳の柔らかい幼児のうちからクラシック音楽を耳から聴いて覚え、繰り返し練習することにある。楽譜からは入らな